

「奥様、おめでとうございます。女のお子様です」

「女の子・・・」

「そうです。いま、お連れします」

奥方が横たわるベッドの元に、綺麗に洗われて、真っ白い布に包まれた赤子が連れてこられました。

「奥様に似てとてもお美しいお子様です」

召使の言葉はお世辞ではなく、生まれたばかりの赤子には、美しさと共に、気品さえ備わっていました。

「お乳をおやりになりますか？」

「ごめんなさい、今は無理。しばらく休ませて頂戴」

奥方は首を振ります。

「わかりました。では乳母の所にお連れしますので、お会いになりたくなくなったら、おっしゃって下さい」

「ええそうするわ」

そう言つて、目を閉じました。

召使はそのまま乳母の部屋に行きました。

赤子の元気な鳴き声が響き渡っています。

「まさか、同じ日に産まれるなんてね」

召使が乳母に声を掛けました。

「そうですとも。これこそ神様のおはからいです」

乳母は、やはりその日の朝に産まれたばかりの息子を寝台に寝かしつけると、もう一人の赤子を受け取りました。すると、息子の方がより大きな声で泣き始めます。

「こら、泣くのはおやめ。お前はお兄さんなんだから。ほら、こんなに可愛らしい妹が出来たんだよ。よかっただろう」

息子にその子の顔を見せました。するとぴったりと泣くのをやめて、笑顔のような表情を見せました。

「あなた様のお兄さんですよ。これからは二人仲良くお乳を飲んでもらいますからね」

乳母は、抱きかかえた赤子の頭を愛しそうに撫でながら言いました。

それから二人は、同じ母の乳を飲んですくすくと成長し、いつしか年頃になりました。娘が大きくなってからも、乳母と息子である兄は屋敷に住み、何かと娘の世話を焼いていました。

ある日の事、兄と娘が屋敷の庭を散歩しておりました。

「ちよつと待って」

「何？お兄様」

兄は返事をせずに、庭に咲いていた一輪の花を摘み取ります。

「これを君にあげよう」

「ありがとう。でもどうして？」

娘は貰った花を手の中ですくくる回します。

「何故って、これ位しか、僕が君にあげられる物がないからさ」

「どうゆう事？」

「わかっているだろう。君は貴族の娘。そして片や、僕はその使用人の子供だ」

「だから？」

「だから、せめて美しく咲く花を見つけたら、それを君に贈ろうと心に決めていたんだ。ほら、髪に挿してこらん。そのお人形さんみたいな顔がさらに華やかになるよ」

兄は、娘の手から花をとると、そつと耳の上に挿しこみました。

「ありがとう」

兄の手が髪に触れたので、娘の顔は上気したようになりました。

「お兄様・・・。私、お兄様の事を使用人の子供だなんて思っています。それよりも、いつかお兄様のお嫁さんになりたいと常々思っていました」

「それは本当かい？」

「本当です」

兄は娘の頬に手をやり、顔を近づけます。二人の唇は重なり合いました。

「そこまでにおし」

木の陰から奥方、つまり娘の母が姿を現しました。

「いったい何様だと思っているんだい」

そうやって兄の頬を叩きます。

「お母様ひどい、やめて」

「お前は黙っておいで。全く世間知らずに育ってしまったものです。身分の高いお前が、下男と結婚できると思っているのかしら。まだ子供だと思って油断していました。早くお父様と相談して、お前の嫁ぎ先を決めないといけません」

「私はいやです」

「いやも何もない。親の決めた相手の所に行くのが一番の幸せです。きっと後で感謝するでしょう」

「でも・・・」

「でもではありません。今すぐ自分の部屋に戻っておとなしくしていなさい。そして、一歩も部屋から出てはいけません」

「それから」

奥方は兄の方に向き直って言います。

「お前は今日限り、この屋敷を出ていく事。お前の母親も一緒です」

「お母様！」

「それが当然の報いです。言ってみれば、恩を仇で返したようなものですから。間違いが起こる前に出ていってもらいます」

兄は険しい目で奥方を見ていましたが、ふと視線をそらすと、体の向きを変え、

立ち去っていききました。

「お兄様いかないで、お願い」

娘は泣き叫びます。

「馬鹿な事を言っていないで、屋敷に戻るのです」

奥方は娘の手首を強く掴むと、そのまま屋敷に向かいました。

「あなた、お話があります」

「どうした、急に改まって」

娘の父は、立派な椅子に座って、髭をなでておりました。

「娘の事なのですが、そろそろ嫁にやる時期かと思ひまして」

「ほう、それであつたら丁度良い。先日王の使者がやって来た」

「王の使者ですか？」

奥方の顔は輝きます。

「そうだ。かねてから懸案だった王宮入りが実現しそうなのだ」

「本当でございますか？それはそれはこんな嬉しい事はありません。娘を王妃として迎え入れて下さるのですね」

「ああ、第二王妃だが」

「かまいませんぬ。第一王妃はもう、年をとり、女の魅力を失っていると聞いております。今、うちの娘が王宮入りすれば、必ずや王の寵愛を一身に受け、世継ぎを産んでくれる事でしょう。そして、その子はいずれこの国の王となるやもしれませぬ」

「まあ、そう早まるでない。もう既に第一王妃の産んだ王子がいて、もうすぐ成人されるらしいからな」

「いずれにせよ、良いお話に違いはありません」

「勿論、そうだ。だが、その前に、娘には行儀作法をしっかり身につけさせ、支度もしなくてはならぬ。それはお前の役目となるが、任せてもかまわぬか」

「喜んでお引き受けします。今まで娘の養育を乳母に任せっぱなしにしていたのを、後悔している所です。幸い、今日、乳母にも暇をやりました。これからは、私が心血を注いで娘の準備をします」

「乳母に暇をやったのか」

「はい。それがどうかいたしましたか？」

「いや、別に」

それは娘が明日は王宮入りするという晩の事でした。

寝台で休んでいると、急に風が部屋に入ってきて、娘は目を覚ましました。

「窓を閉めて寝たはずなのに」

そう思つて身を起こすと、窓のところに人影が見えます。

「誰？」

娘は夜具を握り締めて、震えました。

「こわがらないで。誰だかわかるだろう」

「お兄様？」

「そうだ」

兄は近づき、寝台の上に腰を下ろします。

「どうしてここへ？守衛の者がいたでしょう？」

「生まれ育った屋敷の事。守衛の目をごまかして君の部屋に来る事など、たやすい事さ」

「お兄様。実は私、明日・・・」

「知っている。知っているからこそ来たんだ。君が明日、王妃となってしまう前に」

「ごめんなさい。でも、お父様とお母様が決めた事で、私の気持ちなど、ちっとも考えて下さらなかったの」

「それもわかっている。君は貴族の娘だ。親の都合で嫁に行かされるだろう事も、こうなる前からわかっていた。でも、やっぱり耐えられない」

兄は握り拳を震わせました。

「お兄様・・・」

「君を僕のものにしたい。王のものとなる前に」

「そんな・・・」

「君が嫌だというなら、それでもいい。ここを黙って立ち去る事にしよう。ただ、もう一度君のその柔らかい髪に触らせておくれ」

兄はさらに娘に近寄り、髪を触ります。頭のとっぺんから、長い髪の先まで。何度も何度も。

それから頬を撫で、唇を合わせました。

「お兄様」

「黙って。何も言わないで」

二人の体は重なり合いました。

「王様おめでとうございます」

「王妃様おめでとうございます」

娘が王宮入りしたその日、玉座に座った王と娘の前で、祝宴が繰り広げられました。

美しい衣装を身につけた女達が、踊りを披露しては、二人の前に来て、お祝いの言葉を述べます。

「どうした。楽しくないのか？」

白髪まじりの王が娘の顔を覗き込みます。娘は固い表情をしたままです。

「いえ、楽しいです」

「そうか。しかし、せっかくの馳走にも殆ど手をつけていないではないか」

王はそう言いながら、盃を飲み干しました。お付きつきの者がすぐに、盃に酒を注ぎ足します。

「恐れながら、王様」

「何だ。遠慮せずに申してみよ」

「いえ、ただ、私のような者を、王の後として迎えていただいて恐縮しております」

「そう固くなるでない。今宵は飲んで歌って食べて楽しんではないか」
王の太いごつごつした指が娘の小さな手を取りました。娘はそれを振り払いた
い気持ち必死で抑えています。

「それとも夜の儀式の事を心配しておるのかな」
娘は返事をしません。

「それであつたら心配しなくともよい。生娘の取り扱いには慣れておる。そなた
が苦しまなくてすむように、うまくやるのでな」

耳元で囁くと、王は何事もなかったかのように、次の踊りに目を移します。

娘は目を閉じたかと思うと、次に大きく見開きました。

その見開かれた目には、強い意志の炎が揺れていました。

「痛い、もう駄目。私を殺して」

「王妃様、もう少しでございます。お氣を確かに。頭が見えております」

「では、私の体を切り裂いて、子供を出して頂戴」

「王妃様、いま一度お腹に力を入れて下さい」

医師の言う通り、娘は下腹に力を入れました。今回は今までとは違って、何か
固い物が体から出て行く感触がありました。

「おめでとうございます。無事、お生まれになりました。王子様でございます」

医師の傍らで、侍女が生まれたばかりの赤子を柔らかい布でぬぐいます。

「王妃様、ご覧下さい。立派な男の子です」

「まあ、なんと可愛らしい」

娘は生まれたばかりの赤子を触ります。

「この子は誰に似ているのかしら」

「つぶらな瞳は王妃様に、立派な鼻は王様に似ているかと」

「本当に。そういわれてみればそうだ事」

娘は安心したように言いました。

「王妃様は幸運の星の下に生まれてきたのですわ。王宮に入つてすぐに御懐妊あ
そばして、こうして玉のような王子をお産みになられたのですから」

「そうかしら。私は本当に幸運なのかしら」

「そうでございますとも。これで第二王妃としての王宮での地位は揺るぎなく、
誰からも一目置かれる存在となるでしょう」

「そうだといいのだけでも」

その時、赤子が今よりも大きな声で泣き始めました。

「いけない、お腹が空いているのね。お乳をやるから、その子をここへ」

「申し訳ありません。王宮では、乳母が王子様にお仕えする事になっておりま
す」

そう言つて、侍女は王子を抱いたまま、部屋を出ていってしまいました。

「王妃様、第一王妃様がお見えになりました」

娘が産後の疲れでまどろんでいると、急に第一王妃が入ってきました。娘はゆ
っくりと起き上がると、頭を下げます。

第一王妃は立ったまま、娘を見下します。

「この度は王子が生まれたそうで、おめでどう」

「ありがとうございます」

「ただ、覚えていて欲しいのは、次の王となるのは、第一王子である私の息子です」

「承知しております」

「第一王子は、王の一番最初の息子であると共に、両親共に王族の血を引く正統な王位継承者です」

「王妃様は、隣の国の王女様であったと伺っております」

「そうです。あなたは知らないのですか。私がこの国に輿入れした時には、国をあげての盛大な式典が行われ、国民が皆、私を祝福してくれたのを」

「残念ながら、記憶にありません。おそらくまだ幼かったのかと」

「まるで、自分が私よりもはるかに若いといたいたいですね」

「そのような事はありません。ただ、本当に王妃様が輿入れされた時は、私はまだ物も言えぬ幼子でしたから」

「もうよい」

第一王妃は強い調子で言い、扇子で近くにあった卓を叩きました。

「今日は祝いの品を持ってきました。王子の誕生祝いです」

「ありがたき幸せにございます」

再び娘が深く頭を下げると、その間に第一王妃は体の向きを変え、部屋から出ていってしまいました。

「下に、下に」

王妃の行列の先導がそう叫ぶと、道を歩いてきた民が皆、道の端により、ひざまずいて頭を低く垂れます。

やがて王妃の輿が群集の前を通ります。中には娘が乗っていました。久しぶりの城外への遠出です。

わずかに開けられた隙間から外の様子を見ることが出来ます。群集の中でひとり頭を垂れずにじっと輿を見ている若者がおりました。

「この不屈者」

行列の中から兵が飛び出して、若者の首根っこを掴みます。

「王妃さまのお輿をじろじろ見る奴があるか」

「すみません。あまりに見事な輿だったので、つい見とれてしまいました」

この騒ぎに一行は進むのを止めました。娘は輿の中から一部始終を見る事ができましました。

「お前のような身分の低い者が見る者ではない。それになんだ、その恰好は。お前はこの国の者ではないな」

「いえ、とんでもない。生まれも育ちもこの国の者でございます。ただ隣国に出稼ぎに行った帰りです。その証拠にお国言葉を話すではありませんか」

「ならよい」

兵は若者を掴んでいた手を離します。

「そのかわり、行列が通りすぎるまで頭を地面にこすりつけ、決して上げてはならぬ。いいな」

「承知いたしました」

この様子を見ていた娘は侍女を呼んで、こう言いました。

「あなたはこの行列がいなくなるまでここにいなさい。そしてあの若者の後をつけて、居場所を突き止めるのです」

若者はその母とみすばらしい小屋の中で食事をしておりました。すると、突然前触れもなく戸が開き、立派な衣装をつけた若い女が入ってきました。

戸口の所には侍女も控えています。

「あなた様は・・・」

母は立ち上がり、若い女に近寄りました。

「私です、乳母様。お忘れですか？」

「忘れるものですか。まさしくこれはお嬢様。よもや再びお目にかかれる日が来るとは思っておりませんでした」

乳母の目には大粒の涙が光ります。

「ご存知かもしれませんが、私も王宮入りをいたしました。自由のきかぬ身でございます。こうして、今日ここに来れたのも、本当に奇跡にも等しい事でございます」

そう言って、娘は兄の顔を見ました。兄も娘の顔を見ますが、物言わぬままです。

「そうでしたか。それはそれは、こんなあばら屋においでいただいて、光栄です。どうぞ中にお入り下さい」

娘は勧められるままに中に入り、椅子に腰かけました。

「あれから乳母様はずっとここにお住まいなのですか？」

「いえ、最初は親類縁者の家を転々としておりましたが、次第に居ずらくなりまして、今は息子とこうして二人暮しでございます。幸い、息子も働くようになりまして、今日は、こうやって出稼ぎして貯めたお金を私に渡してくれました」

食卓の上には金貨の入った布袋も置かれています。

「出稼ぎ？ いったい何をしていらしたの？ お兄様」

「雇われ兵さ。体しか持っていない男が出来る事など他にない」

ふてくされるように若者は言います。

「兵？ でもそれは戦いに出るという事ではないのですか？ 命を落とす危険があるのでは？」

「勿論そうだ。僕は死に行ったんだ。幸い生きて帰ってきたが」

「お兄様・・・」

「二人きりで話したい」

若者は奥の部屋を指差します。娘は若者についてその部屋に入りました。

部屋の中には質素な寝台が一つ置かれているだけでした。

「生きていて良かった」

兄は娘を固く抱きしめます。

「本当によくぞ生きてお戻りになられました」

「僕の事はどうでもよい。それよりも君がこうやって生きているのが嬉しいのだ」

「私が？何故私が生きているのが嬉しいのですか？」

「それはそうだろう。君は処女を失って王のもとに行つたのだから。王によって処刑されるか幽閉されてもおかしくはない」

「お兄様、そのような事を考えていたのですか？私が殺されるかもしれないと思

いながら、私の寝室に来たのですか？あんまりではありませんか」
「だから、自分も死ぬつもりだった。異国の地でやとわれ兵になれば、命を落とすであらうと思つて。決して自分だけ生き残ろうと思つていたのではない。信じ

てくれ」

兄は妹の手を両手で握りしめます。

「もういいのです」

妹は首を振りました。

「こうして、二人生きて会えただけで、幸せでございます。それよりも、私は男の子を授かり、今、王宮で大切に育てられています。いつかお兄様にも会つていただければ、と思います」

「何故僕が？まさか・・・」

「そのまさかでございます。私の息子はあなた様の子供」

「そんな証拠がどこにある。たった一夜だけだ。君と過ごしたのは」

「そんなに興奮しないで下さい。確かに私の息子がお兄様の子か王の子かは、神のみぞ知る所です。でも私はお兄様の子供であると信じています」

兄は寝台に腰かけ考えこんでいました。

「侍女を待たせておりますので、もう行かねばなりません。でも、また会つて下さいますね」

「ああ」

「約束ですよ」

娘はそう言い残して立ち去りました。

「お兄様ここです」

娘は外からやってきた兄を建物の中に招き入れます。

中には大きな寝台があり、美しい布で覆われています。

「何だ、これは。売春宿ではないのか？」

「そんな、滅相もない。私がお兄様とお会いするためにわざわざ用意させた場所です。さあ、もう、いい加減、その異国のお召し物をお脱ぎになって。なんだか別の人のように思えます」

兄は言われるがままに服を脱ぎました。その下には筋肉がたくましくついた肉

体が見えます。そして、皮膚には痛ましい傷あとがいくつも残っています。

「おいたわしい。こんなに沢山の怪我をなさつて」
娘はなぞるようにその傷を一つ一つ細い指で撫でました。兄、その娘の動きを

じつと見、そして、突然抱きしめました。

「会いたかった。どれだけ君に会いたかったか。言葉では説明できない位だ。異国の空の下にいても、戦いの場にも、君の声、君のこの細い指、そしてこのしなやかな体を思い浮かべていた」

そう言うて口付けします。

「私もそうです、お兄様。いつも王の寝室に行く時は、目を固く閉じて、お兄様だと思つて時を過ごすのです」

「王の寝室？ そうだ、君は王妃なのだ」

兄は体を離します。

「お願いでございませう。今日はお兄様の腕に抱かれようございませう。そのために、嘘を重ねてお城を抜け出してきました」

娘は、汗のにじむ兄の胸板をじつと見ておりました。

「何事だ」

二人が裸のまま寝台で休んでいると、二つの怪しい人影が寝台に近づきます。そして持つてきた縄で二人を縛り上げようとします。

「チンピラめ」

兄はいとも簡単にその縄を振りほどき、その影を叩きのめしました。

「命をかけて戦う事の厳しさを知らんやつだ」

影は床に倒れてうめき声を上げています。

「お兄様助けて」

見ると、娘の方はもう一つの影に後ろ手に縛られようとしていました。

「こいつ」

兄はこの影も、自慢の拳で殴り倒しました。

その影は殴られた所を押さえながら、窓から逃げようとします。

「そうはさせません」

娘は隠し持った短剣で男を背中から刺します。男が倒れると、今度はその体を仰向けにして、心の臓を一息に突きました。それから、床でのたうちまわっている男の心臓も。

娘の手は血で赤くぬれていました。その血をじつと見つめます。

「どうとう私の手も赤く染まっています」

その顔は笑っているようにさえ見えます。

「殺す事はなかったのに」

「殺す事はなかったですって？ 殺すしかなかったのです。見て下さい、この縄を。この者達は、私達を生け捕りにして、王の前で辱めようと企んだに違いありません。秘密を知られた以上、生かしておいては、どんな災いを招くかしれません」

「それもそうだ。刀を抜いたのは君であっても、僕も同罪だ。これからは運命を共にしていかなばならぬ」

兄は娘の手についた血を自分の手にも塗りたくりました。

王宮の大広間では、盛大な祝いが執り行われています。今日は第一王子の結婚

式がありました。第一王子の横には、まだ子供と言ってもいいくらいの、幼い姫が座っています。

「どこぞの王女様なのですね」

娘は王に聞きます。

「そうだ。隣国の王女だ」

「隣国？では第一王妃様の縁続きの方ですか？」

その第一王妃は息子と嫁の側にいて、話かけたり、酒を注いだり、何かと世話を焼いています。

「いや、第一王妃の家はな、新しい勢力に滅ぼされてしまったのだ。今はあの娘の一族が王家じゃ」

「そうでございましたか。私はちっとも存じませんでした」

「お前は政治の事など知らんで良いのだ。それよりもかわいい息子を立派に育て上げてくれれば」

「失礼いたしました」

「それで、かわいいわしの二番目の息子はどこにいる？先ほどから姿がみえぬうだが」

「むずがりましたので、乳母に言って奥に去らせました」

「そうか。早く大きくなって、こうやって嫁を貰うのを見届けなくてはのう」

「勿論です。王とはいつまでもいつもまでも、ご一緒しとうございます」

「かわいいヤツじゃ」

王はそっと娘の肩に手を伸ばします。その手を娘は片方の手で握りしめました。

遠くの席から第一王妃が二人の様子を見ていました。

「あはははは、くすぐったい」

王宮内の第二王妃の居間に皆が集まっております。王子と飼犬は、床で転げまわって遊び、王妃と侍女と乳母は、それぞれ椅子に座っていました。

「失礼いたします」

居間の入り口に見知らぬ小男が姿を見せました。

「いったい何の用ですか？」

侍女が戸口までいって、男の前に立ちます。

「王妃様のお遣い物を預かっております」

「王妃様とは第一王妃様の事ですか？」

「左様でございます」

男は部屋の奥にいる第二王妃の姿を認め、深々とお辞儀をしました。

「それでお遣い物とは？」

「この度の王子様の結婚を記念して、皆様に砂糖菓子をお配りしております。男の手の上には、立派な箱が載っていました。」

「それはそれはご苦労様です。王妃様にはくれぐれもよろしくお伝え下さい」
娘は作り笑みを浮かべて言いました。

侍女はそれを合図に箱を受け取り、皆のいる部屋の奥まで持っていきます。

箱の蓋を開けると、そこには色とりどりの美しい菓子が目に飛び込んできます。

「まあ、綺麗」

侍女が思わずそう言うと、幼い王子が手を伸ばします。

「お待ちなさい、はしたない」

娘は王子の手を押さえます。そして、そのまま自ら戸口に行き、まだ立っていた男の前に進み出ました。

「王妃様に、私が礼を申したいとお伝え下さい」

目では早く帰れと訴えています。

「承知いたしました」

男はきまり悪そうに戸口から姿を消します。娘は男が見えなくなったのを確かめてから部屋の内に戻りました。

「王妃様、私が毒見をいたします」

侍女が言って、娘がうなずきました。

侍女は箱の隅にあった菓子をつまみ、口に入れます。

「おいしい」

口に手をあてて、侍女は言いました。

「乳母殿もいかがですか？」

娘は乳母に勧めると、乳母も何も言わず菓子を目をつぶって口に入れました。

「このような上等な菓子を食べるのは初めてでございます」

乳母は言いました。

「僕も」

とうとう我慢できずに、王子は箱の中央にある一番色鮮やかな菓子を手に取りました。それを口にしようとした瞬間、娘がその手を強くはたきました。

菓子は王子の手を離れ、床に落ちます。その落ちた菓子を、飼犬がやってきて舐めます。

急に時間がゆっくりと流れるように、犬は菓子を舐めたかと思うと、一瞬考えのような表情をして、そのまま泡を吹いて死んでしまいました。

「やっぱり・・・」

娘は手を口にあてて、立ち尽くしました。

「お兄様、ここを開けて下さい」

夜中に兄の家の戸を叩く者がありました。兄が明かりを持って戸口に行き、少しだけ開くと、そこには頭巾を深くかぶった娘の姿がありました。

「いったいどうした。こんな時間に。それに危険だからもう会わない方がいいと言ったのは君じゃないか」

「そうですけれども、事態が変わったのです。お願いですから中に入れて下さい」

「ああ」

兄が戸を開くと、娘が滑り込むように中に入ってきました。

「乳母様は？」

「もう休んでいる」

「それは良かった」

そう言つて娘は兄に抱きつき、涙を流しました。

「いった何があつたのだ？」

「第一王妃に毒殺されかけたのです。もう少しで王子が毒入りの菓子を食べるところでした」

「毒殺？それで大丈夫だったのかい？」

「はい。王子の犬だけが悲惨な最期を遂げました」

「そうか。それは良かった」

「ちつとも良くありません。王子がもう少しでそれを食べる所だったので」

「落ち着いて。ともかく毒殺された人はいなかつたのだから。ただこれからはよつぽど用心しなくてはいけない」

「用心ですって？用心だけでは足りません。目には目を、歯には歯を、です」

「いったいどうしようというのだ」

「第一王子を暗殺してもらいたいのです。あなたに。王子がいなくなれば、今は後ろ盾もない王妃はこの王宮にはもはや必要とない人間になりましょう」

「僕が？それにどうやって。王子は王宮に住んでいるのだから？僕が暗殺できる訳がない」

「王宮ではありません。嫁に貰つた姫がまだ幼いのをいい事に、毎夜城下の売春宿にいりびたつていると、専らの噂です。どさくさに紛れて王子を刺し殺すのはた易い事と思えます」

「そうは言つても、この国の王子だからな・・・」

「私達は運命共同体だと言つたのは、お兄様ではありませんか」

「確かにそうだが」

「お願いです。力になって下さい、お兄様」

兄は夜の早いうちから売春宿の前に立っていました。しかし、なかなか王子は姿を見せません。いい加減嫌気がさして家に帰ろうかと思つ頃、ものものしい一団が、売春宿の前にやって来ました。

その真ん中から一番立派な衣装をつけた若い男とお付きの者らしい男が出て来て中に入っていきます。

兄は少し間を置いてから、さりげない風で中に入ろうとしました。

「おい、どこへ行く」

兵士が兄の行く手を阻みます。

「どこって、この中でさあ。野暮な事は言いつこなしでお願いしますよ」

「今夜はもう立ち入り無用だ」

「何故です？今、誰か入つていきませんでしたか？」

「左様。この時間からはあのお方の貸切だ」

中から客として入つていた男達がどやどやと出てきました。皆それぞれにぶつぶつと文句を言つています。

「これでわかつただらう。お前もさつさと帰れ」

「いや、まいったな。馴染みの娘がいるんで、一目だけでも会えませんか」
「今夜は貸切だというのがわからぬか」

兵士は剣を抜いて、兄の前に突き出しました。

「わかりました、わかりました。帰ります」

そう言つて帰るふりをしながら、用心深く売春宿の回りを廻りましたが、要所に兵が立っており、睨みをきかせております。

兄はあきらめて帰る事にしました。

翌朝、娘が王宮内を歩いていると、廊下の反対側を、腫れぼったい目をした第一王子とすれ違いました。

娘は、深くお辞儀をして、朝の挨拶をしましたが、王子はその腫れぼったい目を向けただけでした。

「ううっ」

洗面器で顔を洗っていると、急に吐き気が娘を襲いました。

「どうされましたか？」

侍女があわてて駆けつけます。

「なんでもない」

洗面器の中には、今、吐いたばかりの物が漂っています。侍女がそれを見て言いました。

「王妃さま、もしかして、悪阻ですか？」

「気分が悪いだけです」

そう言う娘に再び吐き気が襲い、洗面器に屈み込みました。

「お願いします。本当の事をおっしゃって下さい」

「ああ」

娘は泣きながら床にかがみ込みます。

「最近王様からの夜のお召しがないと聞きます」

「仕方ないのよ。王は王子の婚礼で忙しくされていたし、お疲れ気味で」

「御事情は何であれ、理屈に合わない御子をお産みになる訳には参りません」

「どうして？私の子供は私の子供よ。王子か王女となる子供なのよ」

「いけません」

侍女は厳しい顔をして首を横に振ります。

「もし王妃様が理屈に合わない御子をお産みになったら、第二王子様の出生さえ問われる事になりかねません。そうすれば、王妃様の身も危うくなるでしょう」

「では、いったいどうしろと？」

「理屈に合わない子供は、誰にも気付かれる前に、始末してしまうのが一番です」

「どうやって？王宮の医師に相談でもしろと？」

「いけません。私にお任せ下さい」

「お兄様、私は悲しくてなりません。今、私のお腹にいる子供こそ、正真正銘お

兄様の子供に相違ないのです」

娘は大きな鏡の前に、夜着を着て立ち、鏡に話しかけます。

「もし私たちが普通の夫婦ならば、ただただ子供の産まれるのを楽しみにしていられたのに」

お腹をなでますが、まだ全くと言っていい程目立ちません。

「何故産んではいけないのでしょうか」

ため息をつきました。

「身分が高く生まれてきた者の宿命でしょうか。なんで、お兄様と同じ平民として生まれてこなかったのでしょうか」

自分が平民の服を着た姿を想像しました。そして首を振ります。

「だめです。やはり私は貴族の娘。そして王の后。それは運命なのです。運命には逆らえません」

娘は護身用に使っていた剣を取り出します。そして、鏡の中の自分に語りかけます。

「王子がだめなら、第一王妃をこの剣で、私が刺しましょう。忍びの者を差し向けたのも、毒入り菓子を贈ったのも、元をただせば王妃に相違ないのですから。ほおっておいたら、またいつ何を企てるか知れません。そして、王妃なき後は、その息子を王子の座から蹴落として、私の王子が王の椅子に座るのです」

娘は自分の腹をなでました。そして、また、吐き気をもよおしたらしく、口を手を当て、椅子に深々と体を埋めました。

真夜中、娘は暗い色の服を身につけ、短剣を手を持ち、裸足で自分の寝室を抜けだしました。そして、第一王妃の寝室の前にきました。部屋の前の火は消え、小姓はすっかり眠りこんでいます。忍び足で中に入り、王妃の寝台に近づきます。

「誰？そこにいるのはわかっています。答えなさい」

闇の中から第一王妃の声がしました。娘は答えません。

「もしすると第二王妃ですか？」

娘は答える代わりに姿を現しました。月明かりにうつすらと照らされて、娘の姿がよく見えます。

「やはり、いつかはこうゆう時が来るのではないかと思っていました」
娘は短剣を自分の胸の前に持ってきました。

「何故です？それは御自分で、私たちを殺そうとした事を認めているのですね」
「殺そうだなんて。ただ、試しに、一つだけ菓子里に毒を入れてみただけです。その証拠に誰も死ななかったではないですか」

「それだけで十分です。私の息子の命を狙ったとすぐわかりました。ですから、私がここに理由がおわかりでしょう。むざむざとあなたに私の息子を殺させるわけには参りません」

「第二王妃よ、仲直りしようではありませんか」

「仲直り？」

「そう。取引と言ってもいいかもしれません。私はあなたに男がいるのを知って

います。あなたの乳母の息子でしょう。その事を王に告げるのはやめて私たちだけの秘密にしておきます。そのかわり、あなたには私の息子である第一王子が次の王となるのに協力して欲しい」

「あなた様は計算間違いをしていますわ」

「計算間違い？」

「そう。私が人を殺めるのを躊躇していると思っていらっしゃるでしょう。だから、そんな交換条件で私が納得すると思っっているのだわ」

「そなたは、自分が殺人犯になってもいいと？」

急に第一王妃の顔に恐怖の色が走りました。

「そうです。あなたはご存知ないかもしれませんが、あなたが差し向けた忍びの者達の息の根を止めたのは、他でもないこの私なのです。私の手はすでに血で汚れているのです」

そう言うや否や、娘は短剣を王妃の心の臓に突き刺しました。王妃は叫び声をあげる暇もなく、息絶えました。

力なく垂れ下がった王妃の手をとり、短剣の柄に巻きつけます。

「息子を嫁にとられて寂しくなった哀れな女の最後です」

娘は高らかに笑いました。

「王妃様、大変です。第一王妃様がお亡くなりになりました」

朝方、娘の寝室に侍女が入ってきました。しかし、娘は返事もせず寝台の中でぐったりしています。

「どうかされたのですか？」

「先ほどから下血がして、体に力が入りません」

「それは大変。王宮のお医者様を呼んできます」

「なりません」

娘は叫びました。

「どうしてですか？」

「そなたが言ったのではないですか。理屈に合わない赤子はいてはならないともし、医者の中から私が孕んでいたと知れたら大変な事になるやもしれぬ」

「では、王妃さまが御自分で始末されたのですか？」

「違う。自然にそうなっただけです。きっと私の子供として生まれてきたくなくなったのでしょ」

「王妃様・・・」

「とにかく、私は今は体の具合が悪いので何もできません、そう王に伝えて下さい」

「かしこまりました」

「それと」

「はい？」

侍女は出ていこうとした足を止めました。

「私のお兄様をここに連れてきて下さい」

「あの、平民の若者をですか？」

「私の愛しい人です。私はもう死ぬかもしれないのです。ですから一目会いたいのです」

「でもどうやって？」

「今は王妃が亡くなって、王宮中が葬儀の支度をしているはずですが。何かの職人のふりをして、ここに紛れ込ませなさい」

「はあ」

「最後のお願いです。連れてきて下さい」

「やってみます」

そう言って侍女は部屋を出ていきました。

「いったいどうしたというのだ」

黒い布に身を包んだ兄が娘の寝室に入ってきました。

「お兄様、私はもう死にます。その前に一目お兄様にお目にかかりとうございました」

「何故だ。ついこの間まで元気だったではないか。まさか毒でも盛られたか？」

「いいえ、自業自得でございます。王妃の心臓にこの手で刀を突き立てました。」

しかし、そのすぐ後から、お腹の中の子が暴れ始めて・・・お兄様の子です。外に出たがって、私と一緒にあの世に行く所存でございますよう」

兄は娘がかぶっている寝具をめくりました。

「ひどい出血だ。医者を」

「いいえ、もう手遅れです。私は覚悟はできています。お兄様と共に過ごした楽しい日々を、死んでも忘れませぬ」

「それであれば、私も一緒に死の旅に出よう」

「どうゆう事ですか？」

「私たちは同じ日に生まれた乳兄弟だ。だから同じ日に死ぬのだ。遠い国の戦いから生きて戻れたのが不思議だった。しかし、そなたと一緒に死ぬ為だったのだ。真実の愛の証拠に、私の命を捧げよう」

「本当ですか、お兄様。私のために命を落として下さるのですか。お兄様と一緒にあれば、冥土の旅も怖くはありません。死んで、あの世で夫婦となりましよう」

弱々しい手で娘は兄の手を取りました。兄は娘の手を握りかえすと、腰にさしていた剣を取り出し、自分の喉に突き刺します。

血がほとばしり、宙を舞いました。

「王妃様、王様がお呼びです」

侍女が娘の寝室に入ってきました。

「まあ、なんとという事」

床に血まみれになっている兄の亡骸を見て、侍女は思わず叫びました。

「それに、王妃様、王妃様、しっかりして下さい」

娘の体を揺り動かします。

「生きていらっしゃるのですか、死んでいるのですか？しっかりして下さい」

「生きております」

蚊の鳴くような声で娘は答えました。そして、侍女に支えられながら、半身を起こします。兄の亡骸を見て言いました。

「ごめんなさい、お兄様。同じ日に死ぬことはかないませんでした」

「この死体をどうしますか？」

「夜、皆が寝静まってから、運び出して、川に流すのです」